慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	危機において発揮される文学の底力
Sub Title	The latent power of literature in crises
Author	牛場, 暁夫(Ushiba, Akio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2012
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.102, (2012. 6) ,p.82(225)- 87(220)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2011年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム : 文学は危機を迎えているか
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01020001-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

危機において発揮される文学の底力

牛場　暁夫

わたしは、文学はさまざまな危機を乗り越える潜在的な可能性を有していると考えています。川村さんは、非常に強い倫理観、そして社会性という観点から、現実と戦う文学者についてお話しされましたが、わたしは文学作品の創造性が、危機的状況においてむしろ強く発揮されてきたということを歴史的な立場から論じていきます。

フランス文学の場合ですと、いわゆる文学の危機、あるいは停滞期というのが19世紀末に一度起きています。やはり技術革新の盛んな時期にあたります。臨床医学の発達があり、サイエンスが急速に進化し、電話や飛行機など生活技術の応用展開が起きました。自然科学によって文学独自の想像力が次第に枯渇していったという時期であり、文学がサイエンスによってもたらされたものを後追いで文学作品に採り込むというような時期でした。「小説とは自然科学の実験のことである」という発言が作家によってなされたりもして、文学が科学との類比によって語られてもいます。登場人物も胆汁質などの医学上の体質によって造型されたりもしました。ある特異で異様な人物も、「化学方程式」のように描写し記述されました。科学崇拝、理性信仰が広まり、文学は合理主義に近づきました。

しかし、オランダの哲学者キルケゴールは「文学はあまりに精神を失なってしまった」と嘆いたり、クローデルも科学によってもたらされた「唯物論的思考が非常に息苦しい」と語ったりしています。文学が停滞するような時期が始まりました。

しかし、こうした文学の危機的状況を乗り越えるような想像力や創造性もまた一方では発揮されました。自然科学やテクノロジーを崇拝する世相に反発する動きが生まれ、それは逆説的に古い文化の力を引き出すことになりました。つまり、昔から伝えられてきた共同体の生活空間や、アルカイックな生命力が再活性化される、という逆説的な現象が立ち現れるわけです。これがフランスの20世紀初頭です。当然これは、文学に新しい20世紀的な新風を吹き込むことになりました。科学による新しい技術革新は、逆説的に古い文化の古層に眠っていた力を独自の形で蘇らせることになりました。

わたしの専門とするプルーストはこういう時期に出てきた作家です。彼は、お父さんが著名な医学者だったので、当時の花形である医学書をよく読んで知ってはいたのですが、彼はむしろ合理的思考に基づく医学書からでは得られないような、想像力や創造力を十分に展開しました。小さな農村の人々の昔から伝えられている習俗や神話、祝祭――そうした民衆レベルの共同体を描き、神話的なまでのエネルギーを文化の古層から汲み出したのです。彼は当時の医学やテクノロジーをよく知っていましたし、作品にもよく使ってもいます。たとえば、当時の最新テクノロジーである電話を描くけれども、ただしそれはオルフェウス神話のような、古くからの神話的な想像力・創造力をかきたてるものとして描かれている。サイエンスという近代の産物が、非常にアルカイックなものを呼び覚ますという、反転するような想像力・創造力の横溢に立ち会うことができます。たとえば当時普及し始めた自動車を描いても、アポロン神話の馬車にメタファーによってつなげられてゆく。テクノロジーは、アルカイックな生命力を今によみがえらせる契機となるものとして作品に描かれ用いられている。

同じく20世紀初頭の文学を切り拓いた一人とされるクローデルも、シャンパーニュ地方の小さな村の宗教的とも言える共同体に強く惹かれながら育ちました。パリに上京後、彼も当時の科学万能主義のなかで息苦しさをおぼえて、そうした状況を抑圧や拘束としても感じていたわけです。そういうパリの当時の状況からの脱出を彼も独自の形で試みました。そして彼

もまた、シャンパーニュ地方に根ざす土地の昔ながらの文化を独自に展開し、新しい時代における文学的想像力・創造力を表現しようとしました。

こういう事情は、ベンヤミンの『パサージュ論』に著わされています。『パサージュ論』は1927年から40年にかけて書かれたのですが、発明発見が相次ぎ、日々テクノロジーが革新されていく19世紀末のパリを19世紀の首都ととらえてはいますが、当時の勝ち誇る近代テクノロジーの下からは、むしろ太古からの神話的な生命力が実は呼び覚まされていたことを指摘しています。技術の革新的テンポは、神話的な太古からの自然をよみがえらせる、そういう逆説的なことをベンヤミンも言っているわけです。技術の結果は、かえって昔ながらの先史時代的な戦慄を呼び覚ます。19世紀末の自然主義的なサイエンス　万能によって、文芸は危機、停滞を迎えますが、そのことによって逆説的に古くて新しい想像力が呼び醒まされたということは、歴史的にも言えるのではないでしょうか。

日本でも類似した事が起きています。呉爾羅（ゴジラ）の誕生がそれです。1954年、ビキニ環礁でアメリカが水爆実験をし、設定された危険海域を超えて放射能が降り、操業中の漁船第五福竜丸が被曝し、このため乗組員一名がその後死亡します。同じ年の秋に「水爆大怪獣映画　呉爾羅」が封切られ、大変な評判を呼び、観客数は961万人を数えました。これがシリーズの第一作目。そのときは、ゴジラは漢字で書かれていました。呉爾羅は日本の伝説上の怪獣で、南方の大豆島に昔から生息していた。それが水爆に刺激されて出てきた。つまり、水爆実験が、非常に古い日本の文化を目覚めさせたという設定でした。ところが第二作以降では、伝説上の古来の怪物が目覚めたという箇所を全部消してしまった。さらに、漢字も消してカタカナにした。要するに、古い文化が目覚めた、民衆レベルの文化遺産が目覚めた、というスケールの大きな設定を消して、サイエンスの産物というような方向へシフトしていってしまった。近代科学の産物オキシジェン・デストロイヤーという最新兵器によって呉爾羅は異物として排除され、消されますが、その死に接して、多くの観客は涙したと伝えられています。日本の伝説上の怪物という文化的な要素を消す。これは非常に残

念だという感じがします。

日本のほうはというと、大正末期が文芸の停滞期です。何より大正12年の10万人以上の死者を数えた関東大震災によって、大正末期は文化的にも、文学的にも大打撃を受けました。しかし、ここでもまた文学の衰退を予想する向きをくつがえすような逆説的な展開が起きています。直後の昭和初期に入りますと、ご存じのように、非常に多くの文学的傑作が誕生し、また日本の大衆文化も一気に盛り上がる。当時の銀座の復興ぶりは、水上滝太郎『銀座復興』（岩波文庫新刊）に描かれてもいます。

私はここで藤村の『夜明け前』に触れておきたいのですが、藤村は昭和4年から10年にかけて、長編小説『夜明け前』を書きます。昭和初期に書かれたこの『夜明け前』という小説も、故郷の生活文化に潜んでいた民衆のエネルギーを溢出させた一大傑作です。藤村の家は、中仙道木曽の大名が泊まる本陣と呼ばれる宿屋であり、藤村は家の蔵から、昔からの庶民たちの生活文化を記録した資料を見つけ、それはまるでこんこんと「湧き出る井戸」のようなものとなって長編小説に確実に大きなエネルギーを、歴史文化的な厚みを与えて、生き生きとした幅の広い一大傑作が誕生することになったのです。篠田一士も『世界の十大小説』のひとつにこの『夜明け前』を挙げています。篠田はこの作品には同心円が3つあると言っています。一つ目の円では主人公の生涯が物語られ、二番目は和宮下向から大政奉還あたりまでの日本の変動期が書かれている。そして、3番目の円が作品に非常に強い生命を与えている――青山家がこの馬籠、妻籠の地に居を定め、ささやかながらも宿とよばれる共同体をつくりあげてきた生の営み、そこに住む人々に生の慰めを与えてきた恵那山一帯の自然が小説に生彩を与えています。大震災によって危機に落とし込められていた文学は、その直後に古くからの生活文化という古層に立脚するたくましいまでの想像力をここにおいても見い出したのです。

2011年夏に村上春樹はインタビューを行ない、そこでこう言っています。ところどころ省略させてもらいますが――「『1Q84』の中心主題は、違う世界に行くことですね。今ここにある世界とどう違うかというと、一番

大きな違いは、そこがよりプリミティブな世界だということなのです」「大地から這い出してきたリトルピープルが暗闇の中で人知れず活動し、我々が見慣れているはずの場所をあちこちで駆け上っていく世界です」「神話世界に近接したものです。その中で、人が生き延びていくには、やはりより原初的な胆力を身に付けなくてはならない。既成の価値基準が通用しない局面があります」。

戦後日本は経済原理を優先し、あるいは科学技術優先へと突っ走っていって、文学は抑圧され、過小評価される傾向がどうしてもありましたけれども、そういう文学の矮小化という傾向のなかで、まだ眠っている文化遺産、我々が再活性化しなくてはならない領域が、まだ地下に息づいているのではないかと思います。

最後の例となりますが、シャルロット・デルボというフランス人作家は、『怪物、私の仲間たち』という作品を書いた。怪物とは何かというと、文学作品のことです。彼女は、戦争中、強制収容所に入れられるのですが、強制収容所という過酷な極限状況において、ごく数冊の文学作品を読みふけった。結局、彼女は生還できましたが、戦後フランスのパリに戻っても、なかなか現実に再適合できない。人々に不信感を覚えつづけていたし、新聞を読んでもなかなか理解できない、言葉がすべっていく。ところが、彼女には次第にわかってくる――収容所で読んだ詩人によって創造された登場人物たちのほうが、現実の血を備えた被造物たちよりも真実であったのだ。そうした文学の登場人物たちには無尽蔵の豊かさが宿り、文学作品にはいつまでも消えない精神的な存在感が宿ることを。これは大変な文学作品に対する賛辞です。「だから文学の登場人物たちは私の友人であり、仲間である。彼らのおかげで、すべての存在の連鎖のうちで、また歴史の連鎖のうちで、われわれは他の人間たちと結ばれるのである」。このように、文学という文化は一面では非常に壊れやすく、無視されやすいものですが、しかしそれは、まだ生きていて、蓄積されていて、伝えられつづけていて、フランスなり日本なりいろんな共同体において新しい表現を生み出している。根源的な精神活動を再活性化するように、我々に呼びかけくる

し、声を発している。そういう豊かな可能性をフランスも日本も有している。たとえサイエンスや、過度の経済優先主義、また巨大災害が文学を抑圧し、阻害し、過小評価する時期があるとしても、われわれはまだ文学の豊かに持続している潜在性を掘り起し、再活性化しつづけなくてはなりません。